

小説 三津谷鷹介

挿絵 syokuyou-mogura

わたしを選んでっ!

エッチな巫女さん×3

立ち読み版

序章 夏の終わり、思い出の山村

第一章 再会の挨拶は巨乳のご奉仕（仕方なく……？）

第二章 巫女には足技がない……そんな風に考えていた時期が俺にもありました

第三章 フェロモンお姉さんは口がお上手

第四章 過去と現在、つながる想い

第五章 両手に巫女の大脱走

第六章 恐怖！ 神罰の正体

終章 わたしを選んでっ！

006

012

043

070

094

141

188

232

登場人物紹介

Characters



なかね ゆか
中祢 柚香

むなき
胸狹神社の巫女。活発で勝気に見えるも、本当はわりと潔癖かつナイーブな性格。主人公の従妹でもある。

かみふさ あんな
上総 杏奈

くちなで
口撫神社の巫女。スタイルもよく、フェロモンたっぷりのお色気お姉さん。



みやしろ かい
宮代 開

ごく普通の男子学生。長期休暇で実家の本家がある地方を訪れる。

しもじょう

下條 ちえり

あずり
足擦神社の巫女。あどけない性格の持ち主で、性のことに関して興味しんしん。

拝殿の前で言いながら、歳こそ中年にさしかかっているがどこか少女のような若々しさを感ぜさせる巫女はちらりと心細げに建物を見やった。

なんだろう、と疑問に思いながらも、開が拝殿の扉に向かって歩きだすと、先代の巫女はようやく来た道を引き返し始める。しかし、鳥居の手前で再び立ち止まって振り返り、まだ外に立ってそちらを見ていた開と目が合うと、慌てて前を向いて去っていった。

「おいおい、大丈夫かよ。一体、この中に何が待ってるんだ……」

その様子にやや不安を感じながら、青年は思い切って古風な建物の中に踏み込んだ。

「……え？」

そして中に入った瞬間、開は思わず立ち止まって声を上げてしまう。

昨夜の胸挾神社と同じ造りの拝殿の奥にちよこんと座っていた巫女は、これも昨夜と同様、開とは顔なじみの少女だったからだ。ただし、付き合いの長さはだいぶ違う。

「まろうどのお兄ちゃん、いらっしやいませ。そんなところでぼーっとしてないで、早くこっちに来なよ」

はきはきと喋る、日焼けした小さな顔の上には黒髪のお団子が二つ。

一昨日の夕食の際、開に食後の茶を運んできた少女がそこに正座していた。違うのは、紅白の巫女装束をまとったその格好。

「……君、巫女だったのか」

最初の驚きが収まった開が近寄りながら問いかけると、少女はあの夜に見せた無邪気な

顔で再び笑い崩れた。

「うん。そうだよ。『わたくし、この神社の当代の巫女、下條しもじょうちえりと申します』……な
ーんてね。よろしくねっ!」

「よ、よろしく……!」

柚香と違つて、ずいぶんとフランクな喋り方をしてくる巫女だった。

開が改めて床に座した少女の姿を見直すと、千早の下の白衣は普通だったが、緋袴の丈
がずいぶんと短い。まるで最初に会った晩に着ていたセーラー服のスカートのように腿の
途中から脚がむき出しになっていて、その代わり膝のすぐ上まで届くオーバーニーソック
スのようなものを履いているようだった。

「じゃあ、代替わりの神事を始めます。まろうどのお兄ちゃんはその座つてください」
ちえりが指示した先には、昨日の椅子とは違つて毛氈もうぜんが敷かれていた。

青年がそこに腰を落として胡坐あぐらを組むと、向き合つて座つた少女巫女は昨夜と同様、神
社の縁起から語り始めた。

「えっと、この足擦神社は、……いつだっけ。とにかく、ヘーアン時代から続いでる、由
緒ある神社なんだって」

いきなりの大胆な省略に、開は思わず座つたままらずっこけた。

（おいおい、柚香は元号まで言つたぞ。同時にできたんなら、間違いないけど）
聞き手の内心の突っ込みも知らぬ気に、シニヨン髪の少女は楽しそうに喋り続ける。

「お祀りしてるのは、『簾すまた又ひめ比売命』っていう女神様なの。でね、この簾又比売様っていうのは、『スマタ』の神様なんだよ。お兄ちゃん、『スマタ』って知ってる？」

確か、女の子のあそこに直接挿入しないで、ペニスに押し付けて擦ったり太腿で挟んだりして行う擬似セックスのようなプレイだったはずだ。

「ん……、あ、まあ。一応」

年下の少女から突然に性的な単語の話を振られて、開はちよつとどぎまぎしながら答える。しかし、毎度毎度なんて神様ばかり出てくるのか、こちらの神社は。

「知ってるんだ！ エッチなの〜！」

「お、おい」

からかうように言葉を返す少女に、開はちよつと焦って腰を浮かせた。そんな青年の様子を見て、巫女はさらにけらけらと笑い転げる。

「……あのね。昔むかし、この辺りが飢饉になったんだって。そんな時に、旅の偉い人が通りかかって、一晚泊してもらおうとしたの。それで、土地神様の一番下の女の子、簾又姫様がその偉い人とエッチすることになって、脚を使ってその偉い人にいろいろとサービスしてあげたんだって。そしたら、偉い人はすっごく悦んでね。最後に気持ちよくなったら竜神様の正体を現して、雨を降らせて村を助けてくれたんだそうだよ」

話を再開したちえりはそこで言葉を切ると、あどけない顔に笑みを浮かべて言った。「女の子に脚でいろいろされてイッチャうなんて、ヘンタイさんだよ。神様なのに」

「……………」

先ほど、先代の巫女が不安そうだった理由が開にもよく分かってきた。

「でね。竜神様とエッチして村を救ってくれた簾又姫様を、スマタの神様としてお祀りして、豊作をお祈りするために造られたのがこの足擦神社なの。そもそも、スマタのことを『スマタ』っていうのは、この簾又姫の名前が由来なんだよ」

「……………この神社の縁起は、だいたい分かったよ」

巫女の話しぶりにいろいろと問題はあったが、内容自体の理解はできた。が、それと同時に、基本的なところでの疑問が大きすぎて、はいそうですかと納得することはできない。「だけど、昨日行った神社で聞いた話では、昔起こった同じ事件が別のお姫様の働きで解決したことになっていた。これって、一体どういうことなの？」

まろうど様のその言葉を聞いた途端、巫女少女は小麦色に焼けた柔らかそうなほっぺをぷくつと膨らませてみせた。

「あのね、それは、間違ってる言い伝えなの。正しいのはこの神社に伝わってるお話だし、……………それにね。男の人を悦ばせるのだから、脚を使っているいろいろしてあげるのが一番いいんだよ。ちえりが今からまろうどのお兄ちゃんにも教えてあげる」

可愛らしい怒り顔が、不意になっこりと笑みの形になる。年端も行かない少女のその大きな瞳の奥に、わずかに喜悅の色が揺らめいているような気がして、開はどきりとした。今夜もまた、『もてなし』が始まろうとしているのだ。

「ちよ、ちよと待った」

思わず、開は手を広げて、近付いてくる巫女を押し留めようとしていた。

「? どうしたの、お兄ちゃん。具合でも悪いの?」

立ち上がった巫女は、まだ完全に子供の、スレンダーな体型をしている。

白衣の襟は胸元できっちり重なっているが、仮に昨夜の袖香と同じ物を着たとしても、そこに谷間が見えるかどうか。膝上十数センチで切れているという、妙に丈の短い緋袴に包まれた腰も未発達で、布地に柔らかいラインを現してはいない。足袋^{たび}は、短い袴の代わりのように膝の上まで伸びているという、見たこともないデザインをしていた。

目に鮮やかな朱色の袴と白い綿布に挟まれた褐色のきめ細かな肌は、女性の色香ではなくて、いまだ性の生臭さとは無縁の少女の健康美の方を強く主張しているようだ。

「いや、あのさ、えつと、君は……」

「ちえり、でいいよ」

「……ちえりちゃんはさ。たとえ儀式とはいっても、男の人とこういうことするの、嫌じやないの?」

昨夜見た、幼馴染みの硬い表情が今でも脳裏から離れない。女の子に嫌な思いをさせるくらいなら、伝統ある神事でも無理にする必要はないのではないかと開は思っていた。

ところが。

「えー? ベつつにー?」

あつげらんかと、少女は青年の気遣いをスルーしてみせた。

「……そうなの？」

あまりにあっさりとした物言いに、開は唾然となる。

「うん。だって、エッチなことって、みんな隠そうとしてるけど、ホントはとっても気持ちイイんでしょ？ ちえりだって、知りたいもん。お社のお勤めで男の人の身体のことに分かるんだったら、それで練習だってしたいし」

「練習、って、いったい……」

「あー！ あのね。ちえり、この前、クラスの男の子に告白されたんだ。それで、まだお返事してないんだけど、お付き合いすることになったら、すぐエッチするのかなとか、分からなくて。……あつ、そうだ。でも、そんなこと、村の人には聞けないじゃない？ だから、都会から来るっていうお兄ちゃんに聞いてみようと思っただけだ」

「……お役に立てず、申し訳ない」

別に開が謝る筋の話ではないのだが、行きがかり上なんとなく謝ってしまった。

「ふふつ。いいよ、許してあげる。その代わりに、ちゃんとちえりに見せてね。男の人がコロンするとところ……」

「で、できれば、お手柔らかにお願いします」

少女は、新しいおもちゃを見つけた子供のように目をきらきら輝かせながら近寄ってくる。嫌々ながらされるよりは遥かにましだったが、この調子で続けられるのもそれはそれ

で不安なものがあつた。

「じゃあ、まろうどのお兄ちゃん。よく見てね。今からこれで、お兄ちゃんを気持ちよくしてあげるんだよ……」

胡坐をかけた青年の前に立ちはだかつたちえりがおもむろに宣言して、袴の右裾をするすると持ち上げ始める。まだむっちりとした脂肪のついていない、子供のしなやかな脚だったが、小麦色の肌がその覗かせる面積を広げて付け根までさらけ出しそうになると、開は男の悲しい性でつい奥を覗き込みそうになつてしまった。

「はい、今はここまでだよ。……あはっ！ もうこんなになつてる。男の人って、わりと簡単におつきくなっちゃうんだねー」

いつの間にか、開のジーンズの前がむくりと膨らんでいた。少女の細い腿の先、恥ずかしい部分を隠す薄布が見えるか見えないかというところで布を止められ、その奥に想像をかきたてられて興奮が先走つてしまった結果だった。

「どーしよつかなー。見せちゃおつかかなー？」

歌うように言いながら、あどけない巫女はつまんだままの袴の裾をはしたなくひらひらと振り回す。舞い上がった布の陰にぷりんとしたお尻の丸みまで見えそうになり、思わず開が身を乗り出しかけた時。

「えいっ！」

小さな足が、青年の肉茎の上に踏み下ろされてきた。

「……くおっ！」

わずかな痛みと、それを圧倒的に上回る性感に、開は呻き声を上げる。

（ふ、踏まれてるっ?! 俺のちゃんぽが……、こんな、まだろくにセックスの知識もないよ
うな子に、踏んづけられてるのかっ?）

きついズボンの中に閉じ込められたまま勃起し、窮屈な思いをしていたところに新たに
加えられた刺激は、巫女の足の絶妙な力加減で背すじにぞくぞくとした震えを走らせた。

見た目は細いが、実際に触られるとぷにぷにと柔らかいその足指が、肉棒の形をな
ぞるように周囲を動き回る。

「ひゃあつ。思ってたより、ずつと硬いんだ」

ちえりは毛糸玉にじゃれつく子猫のように目を細めながら、足踏みプレイを続けていた。
少女が牡竿を押し込むたびに、日焼けした腿の上で緋色の布がするりと流れる。

（遊ばれてるのか? く、くそっ、こんなのが、もてなしなんて言えるのかよ……!）

若い雌鹿のようなしなやかな筋肉が、薄い皮膚の下でくりくりと動いていた。躍動感の
あるその動きは、とうてい男の急所を淫猥に押しこねるものとも思えない。

（……なのに、それなのにっ! なんでこの子の足が、こんなに気持ちいいんだっ!）

健康的な魅力の肢体が行う淫靡な動きのギャップが、開に倒錯的な興奮を与えていた。

ジーンズの中で、早くも先走りの汁がじわじわと溢れ出してトランクスに染みを作っ
ているのが分かる。自分では何も動いていないというのに、息が荒くなってきた。

「あはっ。おちんちんがズボンの中でムクムクってなってる。おもしろおい！」

ちえりの声は、濡れたようにオクターブを上げている。頬にはわずかに赤みが差し、息も小さく弾ませて、彼女がもてなす側とは思えない愉悅に酔っているのは明らかだった。

小柄な巫女の短い袴はすつかりずり上がってしまい、左脚をほとんどまるごとさらけ出してしまっていた。長足袋に包まれた少女の足が敏感な亀頭を撫で回し、裏筋をなぞるたびに、その一番奥の白い布がちらちらと目に入ってきてしまう。

少女の甘い体臭と汗の匂いに交じって、その奥の部分から、ふと女の発情した薫りが漂ってきたような気がして、青年の肉槍はびくんともう一回り大きさを増した。

「ち、ちえりちゃん。悪いけど、ちよつと苦しくなってきたんだ。続ける前に、ここ、開けて……」

あどけない顔に似合わない巧みな技術と、未発達の瑞々しい魅力をもった肢体を惜しげもなくさらけ出しての足愛撫に、喘ぎながら開は訴える。下手をしたらこのままズボンの中にザーメンをぶちまけてしまいかねなかったが、年下の、妹のような少女の前でそんな恥だけは晒したくなかった。

「……へえ？ これって、そんなに苦しいんだ？」

『まろうど様』の訴えに、少女巫女はきよとんとした顔になってその部分を見つめる。故意か無意識にか、くにくくと親指で裏筋をつつき回す動きはその間も止まらず、青年はペニス の付け根で溜まり込んだ粘液がぐるぐると渦を巻いて噴き出す場所を求めるイメージ



をはっきり自覚した。

(ま……まずい！)

危うく精が漏れそうになったのを、かろうじてやり過ぎた瞬間。

ふと、股間から小さな圧力が消えた。途端に、それまで噴出をせき止められていた高圧の欲情が潮のように引いていく。

「……ふうー……」

思わず一息ついた開が巫女の姿を見直すと、少女はおもむろにしゃがみ込んで彼の鼻先に顔を突き出してきた。

「えっと、こんなに簡単にイッちゃったら、お兄ちゃんもおもしろくないよね。あのね、ちえりは、もつといっぱい、男の人を気持ちよくさせること、できるんだよー」

さらにと宣言をすると、ちえりは迷わず開の股間に手を伸ばす。

ズボンの前を開けると、さんざん焦らされた拳句にやつと束縛を解かれた牡槍が、反動をつけるようにして勢いよく飛び出してきた。

……ぶるんっ！！

「わっ！」

男の下腹を叩かんばかりにしてそそり立っている肉柱を前にして、少女はそれまでの無邪気ながらもどこか小悪魔的な笑みとは違う、歳相応の素直な顔に戻って驚いている。

「わー、すごい……。びくびくって、震えてるよ……」

自分の持ち物を様々な角度からおっかなびつくり眺め回されて、青年はいささか決まりが悪かった。

ちえりの足でさんざん責められた淫竿は、すでに先端の切れ込みから大量の粘液を分泌して亀頭から幹までをぬらぬらとてからせている。顔を寄せて観察する巫女の吐息が濡れた皮膚をそよがせて、微妙なくすぐったさを走らせた。

「あのさ、ちえりちゃん。その……足でいろいろするのはずいぶん慣れてたみたいなんだけど、男のコレを実際に見るのは初めてなの？」

開の言葉を聞いて、その部分から顔を上げた少女はぶんぶん頬を膨らませる。

「当たり前じゃない！ ちえりがしてたのはお勤めの練習だけで、男の人とエッチなことなんて、簡単にはしないもん！」

「ご、ごめん」

昨晚とは違った意味で、今夜の神事もやりづらかった。

「……えへへっ。じゃあさ、続き、やろうか。次はこれね」

くるくる表情を変える巫女装束の少女が、すんと開の前に腰を落とす。胡坐をかいた前に、やはり床に尻をついた細い身体が向かい合い、後ろで手をつけて上体を支えた。

一体何を始めるつもりなのか、と身構えてしまう青年に向かつて、短い緋袴からにゅつと突き出した細い脚が二本とも伸びてくる。そのまま、白い足袋に包まれた可愛らしい足が、開の股間で揺れるペニスを左右からぎゅつと挟み込んだ。

「!!」

ぶるぶると揺れる可憐なほつちを口に含む。舌でこりつとした突起を軽く舐めると、敏感な部位を思いもかけない方法で責められた巫女は肢体をびくりと波打たせて反応した。

そのまま、舌でそろそろと肌をなぞりながら、青年は顔を少女の谷間に深くうずめる。パイズリをするとペニスが埋まってしまふほどの迫力バストが作る谷間は、深く、柔らかく、温かく、包み込むように開を迎え入れてくれた。

頭が痺れるほどに心地よい幼馴染みの匂いを存分に吸い込みながら、彼は甘えるように柔肌に顔をこすり付け、谷間といわず乳首といわず、立て続けにちゅうちゅうと音がするくらいに強く吸い上げる。

が、やっぱり望むような嬌声きょうせいは上がらない。

（こいつ、本当に意地っ張りだな！）

生乳にむしゃぶりついたまま、開が上目遣いで袖香の顔を見ると、彼女は袖を口に当てて懸命に声を殺していた。つむつた目の端には、涙の雫さえ浮かんでいる。

（どこまで我慢できるか、試してやる）

興奮に我を忘れて、青年は普段なら考えもしないような意地悪な衝動にかられていた。ぐにぐにと肉丘を歪ませる搾乳マッサージを続けながら、べしゃつ、べしゃつとわざと大きな音を立てて両方の乳首を舐めしゃぶり、乙女の柔肌を唾液でべとべとに汚す。前歯で硬くしこって鮮やかな朱色に色づいた肉豆をこりこりと甘噛みすると、

「……つふつ、……んふううっ！」

抑えようのない性感に細い息が漏れて、しなやかな肢体が若鮎のように跳ね踊った。

(も、もう少し……!!)

少女の反応に手ごたえを感じ、開がいつそう激しく胸を責めようと体勢を変え、ぐっと身を乗り出した時。

「……あ！」

ほんのわずかだが、確かに小さく袖香が声を漏らす。

(? どうしたんだ?)

むしろ、一瞬手は止まっていたのに……と考えた直後、開は少女が声を上げた理由に気がついた。彼女の身体への密着の度合いを深めたことで、それまで硬く反り返って宙空でびくびくと震えていた男の剛直が、乙女の下腹に押し付けられている。二人の身体で挟み込む形になったその勃起肉槍は、自分自身ですら当たっている肌を火照りを感じるほど熱く膨れ上がり、ガマン汁をとると吐き出して巫女の袴に濃い染みを作っていた。

「……っ、……は、……っふ！」

袖香が、せわしなく息を吸い込み吐き出し、大きく目を見開いて幼馴染みの青年の顔を見上げている。

その姿勢になったのは偶然だったのだが、従妹の怯えたような、しかし半ばは覚悟を決めたというようなこわばった表情を見ていると、結局のところ、最後まで行かないと収ま

らない——彼女の柔らかい身体を、全て自分のものにしてしまいたいというのが己の本心なのだと開は気付いた。

ごく、と唾を飲んで、開ははだけられた襟の下、袴の帯の結び目をほどく。震える手で何度もつつかえながら、ようやく袴を脱がせて白衣と襦袢の袖も抜いた。

「……………」

緋毛氈の上、敷物のように開かれた上衣の中に、白い肌を桃色に上気させた少女の半裸身が横たわっている。白い質素なショーツと足袋だけの無防備な姿で、羞恥に両手で顔を覆って小さく震える幼馴染みの姿は、そんな格好にさせた開自身が一瞬固まって言葉を失うほどに美しく、魅惑的だった。

お尻や太腿は年頃の少女らしくむっちりとした曲線を描いているが、小さなおへその周りには無駄な肉もなく、きゅんと引き締まっている。脇腹には、わずかにあばらすら浮いて見えるほどだ。

もちろん、ヌードになっても胸の二つの果実の存在感は圧倒的で、すらりとした裸体とはほとんどアンバランスなほどにふつくらした盛り上がりを見せ、揺れていた。

（きれいすぎるよ、こいつの、この身体……。やっぱり、嫌だ。他の誰にも、絶対渡したくない！ 俺のものにして、俺が、俺だけが、独り占めしたいっ！）

開は、今さらながらに、喉がカラカラに渴いていることを自覚する。

上へのしかかるような姿勢から、少女の傍らに寄り添うように横たわると、

「袖香……」

そつと従妹の名を呼びながら右手を伸ばして、お尻の丸みに掌を合わせた。胸のポリウムに目を奪われがちだが、ぷるぷる震えるヒップも年齢に似合わぬ十分な量感を感じさせて、思わずもにゅもにゅと二、三度手ごたえを確かめるように揉みしだいてしまう。

「……ふあっ!？」

胸よりも、より性感の中心に近い場所を刺激されて、少女が小さく声を上げた。

「お前、おっぱいだけじゃなくて、お尻もでつかくて、敏感なんだな？」

意地悪く開が囁きかけると、火を噴きそうなほど顔を真っ赤に染めた巫女はふいと横を向いてしまう。しかし、固く閉じられた両脚への注意が逸れたその隙に、青年の手がすりとショーツをヒップの丸みから抜きさつた。

「!!」

慌てて再び開の顔を見る袖香だったが、

「脚、抜いて」

幼馴染みに催促されると、観念したように片脚を曲げてその小さな布の塊から外す。

もう、少女の身体の大事な部分を隠すものは、何もなかった。

(こ、これが、女の子の……。いや、袖香の！)

興奮に赤く染まった視界で、開はむっちりした太腿と引き締まった下腹部が合わさる三角形を凝視する。透けるような真っ白い肌に、うっすらとした黒い翳りが貼り付いていた。

吸い寄せられるように青年の右手がその場に近付き、指先が秘めやかな合わせ目にそつと差し込まれる。

くちゅう……

びくっ！ と、それまでで最も大きく少女が全身を震わせた。敏感な、恥ずかしい部分に触れられた刺激のせいなのか、それとも、

（濡れて、る……。袖香のここ、もう、こんなに溢れてる！）

自分の昂りを隣の男に知られてしまったことが恥ずかしいからなのか。

乙女の吐蜜に勢いを得て、開は人差し指を少しずつつ深く差し込んでいった。湿った谷間が、青年のぎこちない動きの手をねつとりと受け入れる。

やがて、肉の狭間の底に、吸い込むようにひくひくとうごめく穴を探り当てると、男の本能がそこが目的地だと告げてきた。

思い切つて手をもう一息進ませると、熱く柔らかく、蕩けるように濡れた粘膜がきゅうつと指先を締め付ける。

くい、くい、と、それでもやつとの思いで中で小さく指を曲げてみると、それだけのわずかな動きでも少女はがくがくと身体を揺らしながら開の裸の胸に顔を押し付けてきた。

「……！　くくくっ！！」

だが、それでも頑なに声を上げないのは、いつそ見上げた自制心という他はない。

（こんなに、狭くて、キツくて……。あと、この恥ずかしがりよう……。こ、これって、

やっぱり、こいつ、経験ないって、ことだよな……)

ちゃんと同意を得たわけでもないのに、そこまでしていいのか？ という自問が脳裏をかすめたが、愛しい幼馴染みと一つになりたいという欲求はもう抑えようがなかった。

「柚香！ 俺、お前が、お前の、ことがっ……！」

べとつく乙女の秘苑から手を抜き、改めて両脚を開いた間に身体を差し込みながら囁くと、それまで目をつぶって何かをこらえているようだった巫女は、おずおずと瞼まぶたを開いてのしかかる青年の顔を見上げる。

柚香の潤んだ、しかし真剣な瞳と、自分の視線とが絡み合って、開は一瞬、彼女との間に何かが通じ合ったような気がした。

(勝手な、都合のいい思い込みかもしれないって分かてる。でも、俺は、こいつと一緒に……。も、もう、幼馴染みの、仲のいい従妹ってだけの関係じゃあ嫌なんだ！)

「い、いくよ……」

掠かすれた声で言いつつ、すでにいつでも暴発しそうなほど昂りきった肉槍に手を添えて、潤った秘裂にあてがう。

ぬちりと、湿った温かい髪が膨れ上がった亀頭の先を咥え込んだ。引き込まれるように腰を進めると、牡竿は底の穴に飲み込まれ、そして急にすぼまったようになった狭間に行き当たって止まる。

床についた腕にかけられた少女の手がかすかに震えていたが、それに気付く余裕は開に

はなかつた。

「お、お前をつ！ 俺のものに、したいんだつ！」

そのまま、小さく叫びながらぎゅつと少女の身体を強く抱きしめると、二つのたわわな豊満おっぱいが青年の胸板でむにゅりと潰れる。そして同時に、下半身では、ぶつっ……と勃起肉柱が少女の柔褻の隙間を突き破って奥に進む感触があった。

「……つく！ んうっ!!」

純潔を破られる衝撃に、さすがの意思堅固な巫女もわずかに呻き声を上げる。

ぎゅつと閉じられた瞼の端から、透明な雫が一粒ぼろりとこぼれ落ちた。

誰よりも大切な従妹の小さな苦鳴を聞き取り、その涙を確かに目にしていながら、しかし開は彼女の苦痛を氣遣ってやることもできなかつた。

処女の聖域に初めて差し込まれた自分の分身を、とてつもなく熱く柔らかいものがぴちちりと取り巻いて、うねうねとうごめくように締め上げている。狭い肉壺の中はたっぷりと吐き出された蜜でとろとろに潤つてるといふのに、細かい無数の褻が幹の表面にびちびちと貼り付くのがはつきり分かつた。

未知の、気持ちよすぎる触感に包まれた牡肉がかあつと熱を帯びて膨れ上がりそうになり、開は腰をかくかく震わせながら懸命に竿の根元を締めて射精感を抑え込んだ。

(なっ、なんだこれっ！ 奥まで、吸い込まれそうで……吸い出されそうでっ！)

わずかでも動くときと激しく進らせてしまいそうで、開はじつと挿入した姿勢を保ったまま、

ようやく感じることでできた幼馴染みの女の部分の味わいに酔いしれていた。

「すっ、すげえ、気持ちいいよ……。袖香の、あそこ。おま○この、感触……。！」
「……………っ！」

生娘の強い締め付けに思わず開が露骨な言葉を口走ると、その巨乳を活かした性技を継承しながらも、潔癖すぎるところのある巫女少女は両手で耳を閉ざして縮こまってしまふ。しかし、男の身体の下でデリケートな秘裂を極限まで膨れ上がった勃起ペニスに塞がれたままの姿では、それも無駄な抵抗だった。

初貫通膣壁の強烈な締め付けがようやく少しずつ緩んでくるのを感じて、最初の波をやり過ぎた青年は本能のままにゆっくりと腰を動かし始める。

破瓜^{はか}の傷痕も新しいうちから胎内に打ち込まれた熱い剛直がずるりと動きだす感触に、

「……………!!」

こらえきれずに、陸に打ち上げられた人魚のように乙女のように乙女のかなやかな肢体が跳ねた。身体の動きに呼応して、ぶるんっ！とその胸の二つの美巨乳が踊り上がる。

大きく割り広げられた白い腿を組み敷いた開は、自分の下の巫女のそのあられもない姿に興奮を高められながらも、やはり一番は秘裂の中の感覚に意識を集中させていた。

「袖香の……。中……。熱くて、とろとろしてて、それなのにきゅうきゅう締まって……。！
なっ、なんでっ！ こんなにつ、気持ちいいんだよ！」

熱いぬめりに包まれた竿がスライドするたび、ぶちゅぐちゅと湿った音が響く。あまり

の快感に、青年の腰の動きはどんどん強く大きくなっていった。粘膜の谷の周囲、ぼつりとした肉の唇に恥骨を押し付けるように最奥まで肉柱を押し込むと、膨れ上がったカリが小さな鑿壺の底をぐつと押し広げて、亀頭の先端がその行き止まりに突き当たった。

清純な乙女の胎内の最も深い部分を最初に汚したという征服感に牡の本能が満たされ、開の腰がびくびくと震える。

「……ふうっ、はっ、はっ……あ！」

だが、男の得ている快樂とは裏腹に、初めての痛みを受け入れている少女は身体をこわばらせてその突き込みを受け止めるのが精一杯の様子だった。

(や、やっぱり、苦しいのか……？ 女の子の初体験は、痛いって言うしな……)

遅まきながら、ようやく従妹の様子に気を配るようになった開は、小刻みに熱い息を吐く彼女の様子に、今さらながらになんとかしてその苦痛を和らげようと——できれば自分と一緒に気持ちよくなってほしいと思う。

その時、彼の目に、自分のピストンに合わせて体の下でふるん、ふるんと揺れる二つの白い豊丘が止まった。

(袖香……。さっき、おっぱいで、感じてた……。ここを触ったら、もしかして……)

開はそれまで床に手をつけて支えていた身体を下ろして、そっと幼馴染みの上に重ねる。二人の肌が密着して、腰の動きも小刻みなものになった。

同時に、空いた両手で汗を浮かべた餅肌バストをきゅつと強めに、だけど優しく握り締

める。せっかくなので、ぴくりと躍った左の乳首にはキスのサービスをしてあげた。

「……………んう!!」

下半身に響く処女散華の痛みをこらえていた乙女は、突然胸元に走った甘い感触に戸惑ったようにきよときよと視線をさまよわせてしまう。敏感な部分で繋がったまま、赤ん坊のようにふくよかな谷間にむしゃぶりつきながら自分の顔を上目遣いで見つめていた幼馴染みの青年と目が合うと、うろたえながら再び顔を背けた。

(……………やっぱり!)

「柚香。恥ずかしがらないで、声、出していいからな……………」

パイザリの巫女に快感を与えるためにはやはりそこを責めるのが正解だと知った開は、淫茎で狭い秘裂を突き込む動きをやや弱め、感度の高い柔乳への愛撫を増やす。

ふにふにと白い丘を揉み続けながら、指で二つの硬くしこった突起をつまんでこりこりと転がすと、幼馴染みは黒髪を振り乱して額に眉根を寄せ、それまでの苦しそうな顔とよく似た、しかし明らかに違う感情を秘めた表情で首のけぞらせた。

「……………つふうんっ! ……んくっ、ひんっ……………」

そのまま弱点のバストへのリズミカルなマッサージを続けるうちに、慎ましやかに開かれた艶やかな唇の間から漏れる吐息はいつか甘さを感じさせるものになってくる。

ふちゅ、くちゅ、ぬちゅぬちゅ……

根元まで乙女の聖域にはまり込み、揺すするような動きでわずかにトントンとその最奥の

壁を突くだけになっていた肉槍の周囲で、徐々にねばつく水音が響くようになっていた。

少女の柔褻が、性悦に再びじつとりと蜜を吐き出し始めているのだった。

「柚香っ。気持ちよく、ないのか？ 感じてる可愛い声、聞かせてくれないのかよっ!!」

青年はいっそう激しく二つの小山のようなおっぱいをこね回しながら、腰の動きをだんだんと大きくしていく。

「……………っ!! つくんっ!!」

それでも、巫女は泣きそうな顔で首を振りながら悦楽に飲み込まれることを拒んでいた。しかしその一方で、乙女の秘苑は極太の肉茎も今や何の抵抗もなくスムーズに飲み込み、突き込まれるたびにじゅぷじゅぷと淫らな音と雫を飛び散らせて、彼女が感じている性感の強さを見せてしまっている。

「イイよ、柚香！ すっごく柔らかいの、奥まで突くとヒダが締め付けて……………!」

「……………っあ!」

蕩けるほどの快楽を与えてくれる少女の柔らかい身体をぎゅっと抱きしめると、やがておずおずと青年の首に細い腕が回されてくる。その直前、巫女が艶っぽく潤んだ瞳を見開き、小さく開いた唇から濡れた喘ぎをこぼすのを、開はかすかに耳にした。

（柚香……………。柚香、柚香、柚香っ!）

破裂しそうなほどに膨れ上がった肉茎が、少女の胎内で暴れまわっている。張り出したエラは柔らかい襞壁を削るようにごりごり動くが、乙女の秘洞はそんな男の欲望すら優し



く受け止めて包み込み、きゅんきゅんとうねって快感を返してくれた。

その少女の抱擁を思わせる媚粘膜の締め付けが、泣きたくなるくらい気持ちいい。

「……はっ、はあっ、はあっ！ くっ！ も、もう、俺……」

もう少して自分が抱く女体に喜悦の声を上げさせられるかというところで、そろそろ開の方に限界が訪れようとしていた。

（終わらせたくない、まだ、柚香との、時間を……。だ、ダメだ、腰が、勝手にっ!!）

温かい蜜に満たされ、とろりと潤った肉壺の中で溶けてしまいそうな淫茎の存在を確かめるように、開は自分でももう止められない勢いで腰を使い続けた。

じゅぱっ！ ぬじゅっ！ ぐちゅっ！ ぶじゅうっ！

「……柚香っ！ 聞こえてるだろっ！ 俺と、はあっ、お前の、あ、アソコが、くうっ！
こんな、ぐちゅぐちゅって、ふくっ！ ひ、一つに、なりたがってるんだっ!!」

うわ言のように言葉を漏らしながら、開がごりつとひときわ深く剛直で子宮口を突き上げた瞬間。柚香が耐えかねたように唇を開き、熱い息を吐き出した。

「……っ！ で、出るっ!!」

「——っ!!」

ぎりぎり、膣内はまずい、という意識が激しいピストン運動に割り込んだ。ぬぼっ！と音を立てて肉裂から引き抜かれたペニス、直後にびくりとしゃくりあげる。同時に、男の首に腕をかけたままの少女の肢体も、白い喉をのけぞらせてがくがくと痙攣した。

少女の軽い身体とはいえ、思いつきり体重をかけられると一瞬よろめいてしまい、すぐには立ち上がれない。両手両足で絡みつかれて、腕を動かすこともできなかった。

「ん……んおっ！」

まるでコアラにしがみつかれた木のような姿で、不意を突かれた開は呻き声を上げることしかできないでいる。その隙に、杏奈は猫のように這い寄って青年の脚の間に身体を差し込むと、早くもベルトに手をかけ始めていた。見事な連携プレーだった。

そのまま、あつという間に力なく萎れたペニスしおがズボンの前から取り出されてしまう。

「あら……。普段の殿方というのは、このようになっていらっしやるのですね」

言いつつ、しなびた根菜のようなそれを、杏奈は大事そうに捧げて唇に含もうとした。

「あ、杏奈さん。俺って、一応、柚香が……その、好きな相手なんですよね？ 親友のそういう男にこういうことしちゃうのって、いかなものでしょうかねっ?！」

なんとかこの状況を回避しようと、唯一自由になる口で必死の説得を試みる開。

「ええと……?」

美貌の巫女は、その言葉を聞いて、片手でまだ柔らかい肉茎を弄びつつ、もう片方の人差し指を白い頬に当ててしばらく考え込んでいたが、やがて、

「……でも、他に方法も考え付きませんし。掟を破るには、『まろうど様』に私たちを抱いていただく他はありませんし。この際、手段は選んでいられませんわ」

天然と評される美女は、天女のような笑顔でにつこりと微笑んで言った。

「うっ……!!」

大人びた巫女が素肌にまもっているのは、表に透けないためなのか、シルクのブラとシヨーツだった。しかし、色こそシンプルなもの、よく見ると凝ったレースで飾られた豪華なデザインで、メリハリの利いたスタイルの杏奈の裸身を彩ってよりいっそう魅力的に見せている。

見てはいけない、と思いつつも、開はたぶたと揺れるおっぱいの滑らかな素肌と、それを包む光沢あるシルクの二つの白が作るコントラストから目が逸らせなくなっていた。

「ちゅむっ。んむっ。ちゅぶ、じゅるうっ……」

巫女の唇が、張り詰めて震える青年の勃起ペニスの敏感な先端に二、三度ついばむようなキスを繰り返し、痛みを感じさせない絶妙な力加減で甘噛みを加える。

苦痛と紙一重の快楽電流が腰の中央まで走って、開はちえりをしがみつかせたまま背すじをのけぞらせて身悶えた。

「……開さん。失礼いたしました、私の方も支度させていただきます。はしたない女と、お思いませんか？ くださいませいね……」

恥じらうように言いながら、杏奈は開の肉竿を根元までくわえ込む。同時に、右手をそろそろと自分の下腹部に伸ばして、白く細い指先をそっとシヨーツの中に差し込んだ。

「……んふっ！」

すぐに、半裸の美女は目を閉じてびくりと身体を震わせた。その動きが口を通して男の

淫茎にも伝わり、思わぬ刺激となる。

「ちゆるん……。んぷっ、じゅじゅうっ！ ん、はぁあっ！ あふう、ひやうんっ！」

開のペニスに音を立ててのおしゃぶり奉仕を続けながら、フェラチオの巫女は同時にその口の隙間から熱い悦楽の吐息を吐き出し始めていた。

白い右手を飲み込んだショーツが、もぞもぞと動き続けている。その中で何が行われているのか、青年はその部分から目を離すことができない。

「ふはんっ！ か、開ひやんに、ちゅぷっ！ 私の、恥ずかしい……はぷっ。はふかひいほほろを、んちゅっ！ 自分で触ってるの、見られちゃって……ちゅ、じゅずうっ！」

くちゅっ、くちゅるっ、くちゅんっ……

開の耳に、かすかにねばついた水音が聞こえてきている。

杏奈の白い頬は透けるように紅を浮かべ、切れ長の目は性感に潤んで、見ているだけでぞくぞくするほど妖艶な雰囲気をもと始めていた。

（うわぁ……。杏奈お姉ちゃん、エッチい……）

その様子は、ちえりですら開の背後で呆然と呟いてしまうほどだ。

「あふう……。んっ！ も、もっと、もっと感じさせてください。開さんの匂い……」

蕩けた瞳で舌をてろりと伸ばして、美女はそり立つ男の剛直を握り、舐め回す。

その股間から響くくちゅくちゅという淫らな水音はもう隠しようもなく高く続き、四つん這いで後ろに突き出された、むっちりとした豊かなお尻の肉がビクビクと何かをこらえるよ

うに痙攣し始めていた。

(あ、あの杏奈さんが、こんな……)

艶っぽい雰囲気をもっているものの、大人びて落ち着いている印象の強い杏奈が自らの手でショーツの中の秘所を擦って慰め、快楽に乱れている様子は意外であるのと同時にとんでもなく淫靡な眺めだった。

「んむっ、んぶっ、ちゅずっ、むぶっ。ずじゅうっ……!」

自分自身の支度を続けながらも、フェラチオの巫女はその本分を發揮して男の方の性器を奮い立たせることも忘れない。

熱い肉槍を咥えたその柔らかい唇が擦り切れるのではないかと思うほど激しく顔を上下させてしごきながら、先端から溢れ出す先走りのガマン汁をちゅうちゅう吸い上げる。

半裸の美女が目の前で身悶えているという視覚からの刺激も手伝って、開は早くもこみ上げてきた絶頂感に下半身が震えだすのを感じた。

「あ、杏奈さんっ! も、もう、やめっ……!」

「……………」

青年が上ずった声を上げると、肌を晒した巫女は上目遣いで彼の顔を見やり、ぴたりと動きを止めた。

ぬろお……ちゅぶっ。

射精寸前まで高められ、ひくひく震える勃起をゆっくりと口から抜き放す。

まるで二人で実際に繋がってセックスを行っていたかのように、彼女自身も顔を紅潮させてふうふうと荒くなった息をついていた。

「ふふっ……。ダメですよ、開さん……。ちゃんと、遅しくしたままのそれで、私のここを突いてくださいな……」

杏奈はゆつくりと膝立ちになると、ショーツに手をかける。ちょうど開の顔の高さくらいの位置にあるそれをわずかに下ろすと、むわっと濃厚な女の媚液の香りが漂った。

三角形の一番下の角の部分はじつとりと色を変え、下の恥毛をわずかに透かしている。

「はぁ、はんっ！ そ、そんなに見ないでください……。私、もう、こんなにはしたなく濡れてしまつて。ちえりちゃんも見ているのに、いけない巫女なんです……」

言いながら、むしろ青年の視線に晒されるのを楽しむかのように、美女は少しずつ光沢ある布地をずり下ろしていく。

栗色のアンダーヘアは細く、柔らかさそうで、開の記憶にある袖香のそれよりは下腹部を覆う面積がやや狭かった。

小さな菱形のその毛は、巫女の吐き出した蜜でべたりと肌に貼り付いている。ショーツがお尻の一番大きい部分を外れて、するりと腿の間に抜けると、ぷっくり膨らんだ肉の丘とクロッチの底にねばつく液体が糸を引いていた。

（もう、びちよびちよびじゃないか！ お、女の人って、こんなに濡れるもんなのか？）

知識として知ってはいたものの、実際に女の子のあそこからこれだけ蜜が溢れるのを見

たのは初めてなだけに、開はてらてらと光る美女の秘めやかな部分から目が離せなかった。薄茶色の草地在り付いた白い丘は、一番下の三角形の頂点で二つに分かれて肉の谷間を形作っている。わずかに開いたその隙間から、小さくピンク色の襷が顔を覗かせていた。シヨーツを脱ぎ捨てて覆うものなくなつた下半身で、じらすように巫女の二本の指がそのふつくらと柔らかそうな肉唇に添えられる。

「では、失礼いたしますね……」

杏奈はそのまま、開をまたぐようにして肌を合わせにくる。青年は思い出したように身体をものがさせたが、背後のちえりに加えて正面から大人の杏奈にもものしかかられてしまうと、もはや手加減抜きで振りほどくことはできなくなつてしまつていた。

我ながら情けないことに、巫女のおしゃぶりでそそり立たされ、自分の手であそこを弄つて濡らす様子を見せ付けられて興奮しっぱなしの淫茎は、全く衰える様子もなく肉壺に突き込まれる瞬間を待ちわびているかのようにびくびくと脈打っている。

「ん、ふっ……」

震えるその先端に、巫女の白い指が添えられた秘裂の入り口が押し当てられた。先走りの男汁と女悦の淫蜜、それぞれが吐き出した媚液ですでにぬるぬるとしたぬめりに覆われる男女の性器は、くちゅりと水音を立てて何の抵抗もなく馴染みあう。

「……は……」

杏奈が腰を落とすようにして体重を少しずつかけていくと、限界まで膨れ上がった開の

亀頭は本人の意思とは無関係に美女の肉唇を掻き分けて中へ潜り込んでいく。

先端が半分くらいまでぬめる柔髪の中に飲み込まれたところで、巫女は秘裂に添えた手を離して両手を開の首に巻きつけた。

「ちえりちゃん、もういいわよ」

合図を聞いて、開にしがみついていた少女はようやく彼の身体を解放する。同時に、

「……ふあうっ！」
思い切ったような熱い息を吐きながら豊かに突ったお尻を一気に下まで落とすと、ずぶちゆう……と淫らな水音を立てて杏奈の肉壺は根元まで開の分身を飲み込んでいた。

「……ううっ！」
自分の意思とは全く関係なく、ひたすらリードされたままのほとんど逆レイプのような挿入だったが、あまりの気持ちよさに感情とは裏腹に思わず呻き声が出てしまう。

開が知っている女の子のあそこの感触は柚香のものだけだったが、それとは全然違っているということがはつきり分かった。

細かい髪がきつく縮まり、中に吸い込むようにうねっていた柚香の秘洞に比べて、杏奈のそれはそれほど強く締めてはこない。その代わり、どこに壁があるのか分からないほど柔らかく、蕩けるように滑らかな感触で全方向から開の肉茎を包んできていた。

濡れた媚粘膜が、まるで彼女のフェラの舌遣いのようにぬるぬると幹を撫で回す。

（柔らかくて、温かくて……。こ、これが大人の女のおま○こ……）

二度目のセックスにして、秘所の味わいが相手によってこれほどまでに違うことを知った開がその快感に腰を震わせていると。

そのたおやかな腕を頭に絡めるようにして、杏奈が強く開にしがみついてきた。

「あ、杏奈さ……」

「ごめんね、柚香ちゃん。ごめんなさい、開さん。少しか、こうさせてください……」
見上げると、巫女の白い額には薄く汗がにじんでいる。眉間には、わずかにしわが寄せられていた。

「……え？ 杏奈さん、あなたまさか……」

慌てて自分の剛直を飲み込んでいる美女の秘裂を確かめようとすると、彼女はいつそう腕に込めた力を強めて、開の頭を胸元に抱え込んだ。

「……んぷっ！」

柚香ほどではないにしろたっぷりした量感の肉果を、レース編みの贅沢なブラが包み込んで支えている、成熟した美乳の谷間に顔を押し付けられて、青年はふごふごと鼻を鳴らしてしまう。控えめにまとった香水の匂いが脳を痺れさせた。

杏奈はそのまま、しばらくゆっくりと深呼吸を繰り返す。

呼吸に合わせて上下する白く柔らかなおっぱいに顔を埋めたまま、開はせめて彼女の苦痛が少しでもやわらぐようにと、じつと身体をこわばらせていた。

「……すみません、開さん。もう、大丈夫、ですわ……」

やがて杏奈は咬くように言って身体を起こすと、勃起竿を飲み込んだままの腰を緩やかにうねらせ始めた。

重く張り詰めたヒップが、細いウエストを軸にして円を描くようにくいくいと自分の股間に擦りつけられる。栗色の恥毛の中に突き刺さった肉槍が、わずかににじむ鮮血と共に粘膜の襞をまとわりつかせながらわずかに出入りするさまがとてつもなくいやらしい。

とろとろに柔らかい膣肉がねつとりとペニスに貼り付いたまま、まるで渦を巻くように根元から回転させていた。

ぬちい……ぬちゆう……と潤滑剤になった粘液のべとつく音が絶え間なく二人の接合部から漏れてくる。

「あつ……、あふつ、んはあつ……」

自分で動きながら、巫女は早くも肉悦を感じ始めているようだった。

目を閉じて熱い息を吐く美貌はもちろん、はだけられた襦袢の間から覗く引き締まったお腹の肌も、艶っぽいピンク色に染まってしつとりと汗を浮かべている。

「あんっ……。か、開さん……。かたい……。おつきい、です……。わたしの、おま〇こ、開さんの形に、広げられちゃってますうっ……」

うわ言のように淫語を口走りながら、杏奈はより熱心にむちむちしたお尻を振りたてた。ブラに包まれた豊満なおっぱいもゆさゆさと揺れて、ふわりと発情した雌の匂いを撒き散らす。

せわしなく呼吸を繰り返して乾くのか、ぼつてりとした唇をちろちろと舌で舐め回しているのがなんだか卑猥だった。

「……くそっ！ 杏奈さん、あなたやつぱり、男を誘うツボをよく分かつてるよっ！」

それまで受け身だった開だが、お姉さん巫女の痴態に結局我慢を続けることはできなくなってしまふ。片手で細い柳腰を抱き寄せながら、もう片方の手は襦袢の中に差し込んで、もっちりとした柔らかいヒップの肉を驚掴みにした。

「……んひゃんっ!!」

ひたすら自分で肉竿を上げて得る快樂に酔っていた美女は、突然始まった青年の反撃に不意を突かれ、刺激をそのまま受け取って思わずかん高い嬌声を上げる。

大人っぽい杏奈が少女のような声を上げるのが可愛らしくて、開はそのまま男の掌でも掴みきれないほどの大きなお尻を揉み込みながら、対面座位で腰を弾ませ始めた。

「やつ！ だめえっ！ ずん、ずんって！ 奥にきちゃうっ！ お尻も、そんなに揉まないでくださいっ！ おま○こ突かれながらそこ弄られると、力が抜けちゃうのおっ！」

その言葉通り、剛直がじぶと音を立てながら上下動を始めると、巫女自身の動きは途端に腰が抜けたように頼りないものになった。

熱く張り詰めた先端が一番奥の子宮口を叩くたびに、小さく悲鳴のような喘ぎ声を上げて開にしなだれかかる。丸く大きなお尻を擦りつける動きは、いつの間にか男のピストン運動に合わせた迎え腰になっていた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性に入っていない

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!